

『伊勢物語』の主題による変奏曲集

— 古典研究を蘇生させる試み —

島内 景二

1 はじめに

「作品の真実」ないし「表現の真価」とは、果たして何なのだろうか。それらは、そもそも実在するものだろうか。人間が「本当の自分」を発見しようとしてどんなに喘いでも遂に「本当の自分」に到達しえないように、文学作品の「真相」に読者が辿り着くことは不可能なことなのかもしれない。

膨大な「真実のかげら」や「偽りの真相」だけが、無数の読者たちによってつかみ取られてきた。これを、「さまざまな文学的真実」が解明されてきた、と単純に喜んでよいのだろうか。あるいは、すべてが徒勞な努力であつたと全否定してよいのだろうか。

文学は、特にその中でも婦女子の娯楽の道具であつた物語ジャンルは、発生段階ではどのように読んでもよいという底なしの自由さが売り物だつた。けれども中世社会にあつて次第に和歌や有職故実の「権威づけ」の手段として使用されてゆくうちに、この作品はどのように読まねばならないという「強制」が発生してきた。しかも、主流を占める権威ある読み方が、時代と共にいともやすやすと変わってしまうことが常であつた。

現代の国文学者たちが従事している「研究」は、客観的で唯一の「真実」に至る読解方法を求めるがために、ややもすれば自由で豊饒な読み方を強制的に排除する危険性がある。それによって、「文学の真実」が明らかになっていれば問題は何かもない。ところが、人文科学を標榜して研究すればするほど「文学性」が消えうせるといふ、武蔵野の逃げ水のごとき隘路に現代の文学研究は陥っていない

だろうか。なにかなく、物語ジャンルの研究は。

この「研究」という名の泥沼からの脱出方法は、そう簡単には見つからないだろう。どんな読み方であっても、そういう読み方をした人間が実在した以上、すべて「作品の真実」をつかんでいると居直るのも一つの方法だが、その場合「自由な読書」と「研究」の差異が説明できなくなる恐れがある。かと言って、「唯一絶対の真実」に辿り着くのは、至難を極める。あるいは、永遠に不可能であろう。

ここで、過去を振り返ってみようではないか。かつては、「科学」ではない「研究」がなされていた時代があつた。それは、「自由気ままな読書」とほとんど同義語の「研究」であつた。それを現代にそのまま再生させることは、不可能である。けれども、「物語研究」がまだ「文学的」でありえた草創期の息吹に触れることによって、過去のある時点から分化してきた客観的な研究の流れを一旦中止し、もう一度「進化」をやり直させることができないものだろうか。

そういう問題意識を持つて、これから『伊勢物語』を読み直したい。現在の時点で「最も真実に近い」読み方とされている解釈以外に、これまでどのような読み方が試みられてきたか、確認してみよう。まずは、現在の「研究」に揺さぶりをかけることが何よりも先決だと思ふからである。そのうえで、「あるべき文学的研究の可能性」について、思索してみよう。「研究」と「読書」を区別する必要がそもそもあるのか、そのあたりから再考すべき時期が今来ているのではないだろうか。

2 「九十九髪」の主題による三つの変奏曲

まず、『伊勢物語』六三段の世界から分け入ろう。ここには、成人した三人の息子がいるが、年甲斐もなく若い男を好きになつてしまった老女が登場する。その老女は、三男の仲介で、在原業平と同衾することができた。この六三段の世界がどのような解釈の可能性に満ちていたか、そしてそれぞれの時代でどのように解釈されてきたか、その歴史を辿り直してみたい。

文章表現は、ある意味で「楽譜」のようなものである。そして、さまざまな解釈は、特徴的な「名演奏」に喩えられよう。あるいは、テキストとしての文章表現が「主題」であって、さまざまな解釈が「変奏曲」に喩えられるのかもしれない。

ともあれ、まずは「原典」としての『伊勢物語』六三段の本文を先に提示しておこう。

2・1 主題の提示

昔、世心^{よこころ}つける女、いかで心情けあらむ男に逢ひ得てしがなと思へど、言ひ出でむも便りなさに、まことならぬ夢語りをす。子三人^{みたり}を呼びて語りけり。二人の子は、情けなく答へて止みぬ。三郎なりける子なむ、「よき御男ぞ出で来む」と合はするに、この女、気色いとよし。

異人^{ひと}はいと情けなし、いかでこの在五中将に逢はせてしがなと思ふ心あり。狩し歩きけるに行き合ひて、道にて馬の口を取りて、「かうかうなむ思ふ」と言ひければ、哀れがりて、来て寝にけり。さてのち、男見えざりければ、女、男の家に行きて垣間^{かきま}見けるを、男ほのかに見て、

百年^{ももとし}に一年足らぬ九十九髪^{つくもがみ}我を恋ふらし面影に見ゆ

とて、出で立つ気色を見て、うばら・からたちにかかりて、家に来てうち臥せり。男、かの女のせしやうに、忍びて立てりて見れば、女、嘆きて寝とて、

さむしろに衣片敷き今宵もや恋しき人に逢はでのみ寝む

と詠みけるを、男、哀れと思ひて、その夜は寝にけり。

世の中の例として、思ふをば思ひ、思はぬをば思はぬものを、この人は思ふをと思はぬをも、けぢめ見せぬ心なむありける。

以上が、六三段の「本文」である。どこで改行を設けるか、どこまで漢字を当てるかの判断の中に、既に「解釈」が流入しているわけではあるが、とにかくこれが「楽譜」ないし「主題」に該当する部分である。

この「主題」を素直に読んでみると、いくつかの疑問が読者の心に湧き上がってくるのだらう。この女の年齢は、「百年に一年足らぬ」と書いてあるけれども、本当に「九十九歳」なのだろうか。それほど長寿を保った女性が、異性に執着することがあるのだろうか。もし、「九十九歳」でないとすれば、本当は何歳なのか。そして、なぜ正確な年齢を偽って書いてあるのだろうか。そもそも、この女の実名は誰なのか。

はたまた、女の三人の息子のうちで、なぜ上の二人は母親の願望に対して冷淡であつて、なぜ末の三男だけが母親思いなのだろうか。

このような数々の疑問を放置せず、自分の納得のゆく解答を発見したいと考えた読者が、「研究者」となる。そして、書かれざる表現の「真実」を求めて、探索の旅に出発する。その探索の結果が、それぞれの時代の研究書・注釈書となつて結実する。すなわち、研究者たちによって膨大な数の「変奏曲」が作られたのである。

その中から、まずは王朝末期の「九十九髪」の主題による第一変奏曲を聴いてみることにしよう。

2・2 第一変奏曲（『和歌知願集』）

『伊勢物語』の最古の注釈書とされる『和歌知願集』は、「荒唐無稽」というレッテルを貼られて久しい。けれども、その「荒唐無稽」な解釈は、テキストが内在させているあまたの「難問」に対して正解を見いだしたいという「真つ当な姿勢」に裏打ちされている。以下、『和歌知願集』の注釈内容をわかりやすい現代語に訳した形態で示してみたい。なおかつ、適宜「小見出し」を付した。

2・2・1 小野小町という女

昔、「世心」の付いた女がいました。世心とは、男は女に逢いたいと思い、女は男に逢いたいと思う心のことです。この女は、盛りの年をとくに過ぎてしまひまして、異性と同衾したいという色っぽい願ひは無くなつていたのですが、どうにかして情けのある男性ともう一度夜を共にしたいものだという欲望が再発して

しまったのです。この女こそが、有名な「色好み」の小野小町です。在原業平と出会う以前の小町の人生を、少し御説明いたしましょう。

若かりし頃に絶世の美貌で男たちを手玉に取り、さんざん苦しめた小町も、その報いのためか四十八歳で見る限りもなく衰え果ててしまい、鬼のような顔付きになってしまいました。こうなると、都人は手のひらを返して彼女を汚がって敬遠します。誰も自分を相手にしてくれないので、仕方なく小町は洛西の嵯峨野の片隅の、親切な人が作ってくれた小さな草庵に隠れ住むことにしたのです。野原に自生する蕨を採ったり、谷の慈姑を拾ったりして食物を得たのです。時には、嵯峨野を出て都の近辺で乞食をして施しものをもらって、かろうじて命を永らえていました。

2・2・2 丹治成里との出会い

ある時、洛北の北山に住む狐師で、身分は高くないけれども大変に勇敢な心を持ち主で、狩の名人と世間で評判の丹治成里が、法事を営んだことがありました。彼は長年連れ添った最愛の妻に先立たれたのですが、妻の後世を弔ってあげたいという孝養の念から一周忌の法事を盛大に挙行したのです。その法事の噂を聞き知った貧しい乞食たちが、施しものを得ようとして大量に現れたのです。その中に、ことさら異形の乞食が一人いましたので、不思議に思った成里がその異形の者の正体をそばにいた知人に尋ねますと、「あれこそが、かつては天下の美女として有名だった小野小町ですよ。どんな悪業を作ったからあそこまで報いを受けて、生きながら鬼のような恐ろしい顔かたちに零落してしまったのでしょうかね。年齢もまだ五十歳未満で、人間としての寿命もまだ尽きていないはずなのに、ああまで変相してしまうのは、哀れというか悲惨でありますね」という答えが返ってきました。人々も、「あれが小町だ」と口々に話題にしています。

丹治成里は勇敢な狐師なのですが、やさしい性格の持ち主でしたので、小野小町の身の上にすっかり同情してしまいました。そして、白い御飯を食べさせたりおいしい酒を飲ませただけでなく、「今日は、ここに留まりなさい」と言っただけで引き留めました。そして妻の一周忌の法事が滞りなく終了してから、小町を自分の前に呼び寄せて、「それにしても一体全体、あなたはどのような姿になってしまったのですか」と、事の次第を問うたのです。小町は、成里の質問に一つ一つありのままに返事をしました。

成里は、なおも尋ねます。「有名な色好みのあなたのことです。現在は、昔の

ように異性と逢いたいと思う世心はもうなくなってしまったのですか」。小町は正直に、「どうしてなくなることがあります。けれども、今のわたしは御覧のように鬼みtainな形相になってしまいましたので、どういう物好きな男がわたしに情けをかけてくれるというのでしょうか。だから、わたしの方では男と逢いたいと思っていないようなふりをして生きていくだけです」と答えました。丹治成里も、最愛の妻をなくして一年。異性と逢いたいという心がないことはなかったのです。だから成里には、小町の心が痛いくらいにわかりました。それで、互いの「世心」を鎮め煩惱を消そうとして、その夜は同衾したのです。そして、夜通しさまざまなことを語り合いました。

小町は、「今のわたしはこういう醜い顔になってしまいましたが、心は昔のままです。昔のままにふるまいたいし、昔のままに男の人と逢いつづけたい」と、心情を吐露します。成里は「もつともだ」と思いましたので、北山の自分の家の隣に小さな家を建ててあげ、時には夜に通ってゆくなどして、「妻」として処遇してあげたのです。

2・2・3 小町の出産と、成里との死別

小野小町は、こうして北山の狐師・丹治成里の妻となりました。そして小町は五十歳の時に、成里の子どもを出産しました。成里には、死亡した妻との間に既に二人の男の子がいました。小町の生んだ子は、成里の三男ということになります。

やがて、この三男が七歳になった時に、丹治成里は自分の死期を悟りました。そして、前妻の子どもである二人の男子に向かって、遺言したのです。「お父さんは、もう駄目だ。命は助かるまい。父さんの死んだあと、決して継母にあたる小野小町に冷たい扱いをしてはならないぞ。実の母のように小町を思って、親孝行をするのだぞ。また、三男の行末も、しっかりと面倒を見るのだぞ」。

二人の子どもたちは、親の遺言ですので、その言葉通りに小町と三男をしつかりと養いました。この三男が十三歳になった年に元服させてやって、田村三郎成忠と名乗らせました。

2・2・4 小町と在原業平（付けたり、つくもがみの事）

小野小町は、丹治成里の没後はしばらくは色っぽい心は絶え果てておりました。しかし、またまた昔のような「世心」が湧き起こってしまったのです。そして、

どうかして自分を心から愛してくれるやさしい男の人と逢いたいものだと思うようになりました。それで、自分の願いを夢に仮託して、男に逢いたいという気持ちをはめかしたのです。

継子二人は、父親の遺言を守った立派な人間だったのですが、小町のあまりの常識はずれの願いを知って、「何と不謹慎なことだ。それにしても、七十歳間近の老女の口にするせりふではないなあ」と言い捨てて、さっさと部屋を出てしまいました。

三男は、小町の実子ですから、彼女の心が身にしみてよく理解できます。彼はもともと、「お母さんは若い頃は絶世の美女で、男たちからちやほやされていた。だから、今でもその頃のこと忘れられないのだろう」と思って、「どんな男の人であつてもお母さんに逢わせてあげたいな」と、心の中では考えていたのです。けれども、その願いが実現せずに時間が経って、今日にいたつたのです。

三男息子は、小町の作り話を聞いてから、つくづく母の願いの深さを理解できました。そして、「こうなれば、女性に対して情け深いと評判の在原業平様におすがりするしかない。業平様は、美しくない女性であつても、決してその心を踏みこむこともなく、心からあわれと同情してくださるにちがいない。お母さんの老い衰えなされた容貌も、この業平様だけがお情けをかけてくださることだろう」と決心しました。

ちょうど折しも、在原業平が嵯峨野に鷹狩りのために逍遙していましたので、三男息子は業平の乗った馬の口に必死に取り付いて、「心からお願いがございます。わたくしの母親が、かくかくしかじかのありさまなのですが、ぜひとも業平様にお救い願いたいのでございます」と直訴に及んだのです。そして、業平と小町を逢わせることに成功しました。かくいう出来事が元慶元年のことですので、小野小町は六十九歳、業平は五十三歳、田村三郎成忠は当年とって十八歳のことです。業平の歌に、

百年に一年足らぬ九十九髪われを恋ふらし面影に見ゆ

とあります。「百年に一年足らぬ九十九髪」とは、九十九歳の老女という意味です。小町の本当の年齢は六十九歳ですから、九十九歳ではないのですが、彼女が年を取っていることを強調して、こう詠んであるのです。

「つくもがみ」とは、お婆さんの髪の毛が脂っ気がなくなつてぱさつて、白くなつていふことを言います。皆さんは御存じないかもしれませんが、「つくも」と言つて菅のような草があります。この草は白雪が降つたような色で立ち枯れて、

汁気がなくなつていふものなのです。ですから、脂っ気のなくなつた髪の毛が真っ白になつてしまつたのを、この「つくも」という草に喩えて「つくもがみ」というのですよ。

2・2・5 解説

この第一変奏曲の最大の特徴は、年甲斐もなく壮年の業平を好きになつた女に「小野小町」という実名を与え、「あの色好みの小野小町だから、何歳になつても男を思う心を断ち切れなかつたのだ」と説明した点にある。そしてまた、三人の息子のうち上の二人は小野小町から見れば「義理の子」であり、末の三男だけが「実の子」であるという説明をすることで、「三男は小野小町の実子だつたから、上の二人と違つて母親孝行だつたのだ」と因果関係を付けたのも特徴的である。

この説明方法は、かなり強引である。「強弁」という言葉が、ふさわしかろう。なぜならば、「小野小町と丹治成里」あるいは「小野小町と在原業平」の男女関係は実証できないからである。そもそも、小野小町の歴史的文献は、極めて限られている。

「研究」と言うよりは、むしろ「創作」の方に近い。ただし、テキストに込められていたいくつかの難問には、それなりの解答が与えられている。では、鎌倉時代から室町時代初期にかけての解釈を、第二変奏曲として聴いてみることにしよう。

2・3 第二変奏曲（『冷泉家流伊勢物語抄』）

つづいて、試聴するのは、中世初期の変奏曲である。第一変奏曲ともども、現代人が高等学校の「古文」の授業で学んだ（学習させられた）『伊勢物語』のイメージとは随分違つていふはずである。そのギャップが意味するものにこだわることから、「研究」の問い直しが可能となる。『冷泉家流伊勢物語抄』の説をわかりやすく現代語訳し、小見出しを付してある。

2・3・1 三条町という女

昔、「世心」のついた女がいました。「世心」とは、世の常の心を簡略にした言葉で、夫婦の肉体関係を持ちたいと願う心という意味です。この女の名前は、紀名虎大臣の娘で、文徳天皇のお后の一人だつた三条町というのです。彼女は文徳天皇の寵愛を受けたのですが、天皇の崩御後に洛西の嵯峨野に隠棲していたので

す。その三条町は、在原業平が常に嵯峨野で鷹狩りをするために通ってきているのを目にして、恋い慕い、「業平のような男の人に逢いたい」という気持ちで湧いてきたのです。

それで、三人の息子たちを前にして、作り話の夢の話をします。本当は、「わたしは業平様に恋をしていますから、すぐにでも業平様にお逢いしたい」と言いたいのですけれども、それではあまりにも恥ずかしいので、嘘を言ったのです。「不思議な夢を見てね。それは、神仏のお告げだったのですよ。もしも年齢の若い男の人で、色っぽくもあり情けもあるすばらしい人とわたしが逢うことができたらならば、わたしが昔みたいに若返ることが可能であるという、お告げだったのだよ」。

2・3・2 父親の違う三人の子どもたち

三条町という女性とは、実は文徳天皇の後宮に入内する以前に、源有国という右大臣と結婚していたのです。そして、この源有国との間に、長男の源顕蔭、次男の源関路の二人の男子をもうけていたのです。そのあとで、文徳天皇との間に、自分にとっては三男に当たる惟喬親王をもうけました。

顕蔭と関路の二人の息子は、母親の話を聞いて、「ただの夢の話だな」とだけ考え、まさか彼女が在原業平との関係を願っているという深い含意があるのだということには思いもありませんでした。それで、そのまま部屋を出ていってしまったのです。

それに対して、三男の惟喬親王はさすがに文徳天皇の子どものだけのことはあります。とても聡くて、人の心の奥底がわかるのです。それで、「本当にその夢の通りになって、母上がお若返りになるのはうれしいことです。今、世間では在原業平殿こそが、若くて情けもあると称賛しているようですから、彼と出会った時にその件を切り出してみましよう」と返事しました。三条町も、心からうれしく思いました。

ある時、惟喬親王は業平が嵯峨野へ鷹狩りのために現れたのに行き合って、話をしました。業平の官職は「馬の頭^{うまのかみ}」だったので、馬の頭と口を聞いたというのを、「馬の口を取りて」と洒落て表現してあるのですよ。惟喬親王が、「わが母君がそなたを思いかけているので、その思いを叶えてやってください」と言いますと、業平は諒承してその夜ただちに三条町の家に行って、一緒に夜を過ごしてあげたのです。

2・3・3 「つくもがみ」のこと

その後業平が自分のもとに来てくれないので、三条町は夜間にこっそりと業平の自宅までやってきて、垣根の隙間から中を覗いていました。それを見つけた業平が、

百年に一年足らぬ九十九髪われを恋ふらし面影に見ゆ

という歌を詠んだのです。「九十九髪」とは、必ずしも額面通りに九十九歳のことと解釈しなくてもよいのです。正確には、三条町の年齢は五十八歳でした。「つくもがみ」とは、漢字で書けば「付喪神」となり、いわゆる百鬼夜行のことです。昔の占いの本に、「狐や狸などの動物のたぐいは、百年生きていれば人間に化ける術を身につけ、人をたぶらかす」と書かれています。化け物たちは必ず夜に出現するので、夜行神ともいうのです。九十九歳から化け始めて、百歳で完璧に化け仰せるのです。この三条町は、九十九歳ではないのですけれども、夜間に都大路を出歩いて、業平を覗き見て、本人だけでなく業平にも苦しくつらい思いをさせたために、「喪^{くわ}わざわい」を「付ける」という意味で「付喪神」に喩えられているのです。

また、世の中には別の説を出している手合いもいます。それによるならば、海藻の一種に「つくも」というものがあって、人間の髪の毛が縮れているのと似ているというのです。年を取った人物の髪の毛が海藻のように縮れているというのも、ありえない説ではないのですが、わたしどもは「付喪神」説を正しいと考えております。

業平が今にも外出しそうになったので、三条町は、野薔薇のとげや枳殻^{かき}のとげにひっかかったりはしなかったものの、あわてて帰宅します。人間はいたたまれなくなった時に、「針やとげのむしろに座っているようだ」と言うではありませんか。三条町が業平に見つけられて心から恥ずかしく思ったということを、誇張して「女が薔薇や枳殻のとげに引つ掛かりつつ走り帰った」と表現してあるのです。

業平は、三条町がしていたように、こっそりと家の中を覗きます。そして彼女のあわれな歌を耳にして、夜を共にしてあげたのです。この在原業平という人物は、自分の方で女性を愛していかなくとも、その人が自分を深く愛していれば逢うてあげる人なのです。もちろん、女の方で業平と逢いたいという心がなければ、逢うことはありません。そういう人が、業平なのです。

2・3・4 解説

女の実名が、第一変奏曲とは違っている。けれども、説明方法自体は、ほとんど同一である。三人息子のうち、上の二人と末の息子は「父親」が違っているで、母親に対して異なる反応を示したという。これは、「母親の違い」で説明する第一変奏曲と反対の方面から、同じ説明方法を適用してあるのである。

この第二変奏曲では、かつて「天皇の后」であった女性と、臣下の在原業平との男女関係の発生が重要となっている。「身分違いの恋」というパターンと「年齢違いの恋」というパターンが複合して、六三段が形成されたと解釈されているのである。

また、この第二変奏曲の特徴として、「心理主義的解釈」ないし「象徴主義的解釈」というものがある。「うばら・からたちにかかりて」という表現は、女が恥ずかしく思ったという女性心理を象徴的に表現したものだといふのだ。書かれたことを書かれた通りに読まなければならないという近代的な禁欲主義とは無縁の立場から、「書かれたことの裏側」ないし「書かれたことの逆」を読み取るのである。

「うばら・からたちにかかりて」という「主題」の中に、年甲斐もなく若い男を愛してしまった女の感じたであろう「心の痛み」をリアリティをもって感ずることのできる人物が、この第二変奏曲を作曲したのである。

2・4 第三変奏曲（現在の学校教育「古文」バージョン）

最後に、学校教育の場で、これだけがまるで唯一の読解であるかのようにいかめしく伝授されている「変奏曲」を紹介しよう。勝手気ままではあるものの、想像力の愉悅感にあふれた第一変奏曲と第二変奏曲を耳にされた人には、この第三変奏曲がいかにも「痩せ細って」聞こえないだろうか。

この第三変奏曲にいたるまでには、中世後期から近代までの解釈史の紆余曲折があるのだが、「研究」の到達点を示したいので、あえて一気に現代まで時間軸を動かしたのである。

2・4・1 女の名前は誰でもよい

昔、と言っても、いつのことかは正確にはわからないのですが、一人の女がいました。その女は、名前すら現在まで伝わっておりません。彼女には唐突に、異

性を激しく思う心が湧いてきて、「どうにかして情けのある素晴らしい男性と契りたいものだ」と思うようになりましたけれども、自分の心中を正直に告白するきっかけがありませんでした。また、誰に自分の激情を向けてよいのか、それすらもわからなかったのです。

それで、嘘の作り話をする事で自分の心を伝えようしました。彼女は、本当は見てもいない夢をでっちあげたのです。彼女には、大きな子どもが三人いたのですが、彼らを前にして、おそらく「自分は夢の中で若い娘に生まれ変わっていった。そして、見たこともないような美しい貴公子にプロポーズされたのだけれども、変な夢だね。お前たちは、この夢をどう思うかね」などと話したのでしよう。彼女には三人も成人した息子がいたのですから、本当の年齢は何歳なのでしょう。大変な年のようなですね。それに、彼女の夫の姿がないようですから、おそらく未亡人になってだいぶ時間が経っているのでしょう。

話を聞かされた子どもたちは、母さんが嘘をついていること、そして年甲斐もなく若い男を欲しがっていることを、直ちに見抜きました。それで、上の二人の息子は、「いい加減にしてくれよ」と思いました。そして、上の子の三男息子だけ、母親の真意には気づかないふりをしました。けれども、末っ子の三男息子だけは、母親の心が不憫でならず、好意的な返事をしたのです。「その夢は、母さんにきつとよい男ができるという神様のお告げなのです」と、夢の解釈を示しましたので、女の喜びようといったらありません。

三男息子は、「世の中にはごまんと男がいるけれども、皆思いやりのない男ばかりだ。そういう男は、きつと年を取ってもはや美しくない母さんの相手などしてくれず、もししてくれたいとしても、母さんに恥ずかしい思いをさせるに違いはない。ただ、在原業平様だけは、そうではないという噂だから、どうしても評判の在原業平様と母さんとを結び付けたいものだ」と思いました。

三男息子は、業平が鷹狩りのために馬に乗って都の郊外を走っていると待ち受けまして、途中でその馬を止めました。そして、「失礼ながら、業平様に心からお願いがございます。わたしには年老いた母親がおるのでございますが、実はかくかくしかじか、こういう次第なのです。どうか、母を哀れと思召して、一夜のお宿りを心からお願ひ申し上げます」と申し上げました。在原業平は、母親の心、そして息子の心を大変にあわれと思いましたが、その夜、女の家に来て、一夜を共にしてあげました。

2・4・2 女は現実に薔薇や枳殻のとげに引つ搔かれた

女の心に唐突に宿った異性を思う心は、それで一度は慰められたのですが、その一夜のあとは、男は来てくれなくなりました。女は、いても立ってもいられずに、自分から男の家まで出掛けて行って、庭の方から男の様子を覗き込んだのです。男は、庭の様子が変なので注意していましたら、女の顔がちらっと見えませんでしたので、聞き耳を立てている女にも聞こえるような大声で、歌を詠みました。

百年に一年たらぬつくも髪われを恋ふらし面影に見ゆ

今は昼なのに、わたしはまるで白昼夢でも見ているようだ。

この前ふとした縁で契った老女の顔が、瞼に浮かんでしょうがない。

わたしを恋うる彼女の深い愛情ゆえに、

彼女の魂が体を遊離して、

この昼日中に、わたしに逢いに來たのだろうか。

業平が、この歌を口ずさんだあと、急に思い立って自分の家に出立しそうな氣配を見せたので、女は慌てて自分の家に向かって引き返します。彼が来る前に戻って、迎える準備をしなければなりません。大通りを通ると間に合わないかもしれないので、女は近道をします。それで、茨や枳殻の刺であちこちを引っ掻いたりしながら、ほうほうの態で家に帰り着きました。そして、慌てて寝具を敷いて、今までずっと寝ていたような振りを装いました。

男は、女の家に着しても、わざとすぐには上がりません。女が自分の家ですていたように、今度は自分が女の家から内部の様子をこっそり伺います。女は、なかなか男が来てくれないので、「今夜も一人で寝るしかないのだ」と悲しみながら臥しています。そして、彼女は歌を詠みました。

さむしろに衣かたしき今宵もや恋しき人にあはでのみ寝む

二人で共寝しても寒い今日この頃であるのに、

わたしは一人で敷布の半分だけを占めて、寝なければならぬ。

今宵も、あの人は来てくれなかった。

つれないあの人のどこが、情けある男性なのだろうか。

わたしの傷ついた女心を、どうかいたわって慰めてほしい。

この歌を聞いた男は、心から女の心をあわれに思いました。そして、その夜は女の上に上がって、彼女の心を慰めてあげたのです。

男女の仲の通例としましては、男も女も、自分が気に入っている異性には心か

ら細やかな愛情を降り注ぐ一方で、気に入らない異性に対してはとことんないがしろな振る舞いを見せるものです。けれども、この在原業平というお方は、自分が好きになった女性でも、好きではない女性でも、どちらも同じような細やかな愛情が降り注げる希有の男性であったのです。

2・4・3 解説

むろん、この第三変奏曲にもそれなりの面白さがある。しかし、第一と第二の変奏曲にも、それと同じくらい（あるいはそれ以上の）面白さがある。

ただし、この第三変奏曲は「研究の到達点」にしては、いかにも寂しい。なぜならば、「主題」としての「本文」を読めば誰しも感ずるであろう「疑問」の数々に対して、まったく解答していないからである。なぜ女がここまで若い業平に執着したのか、そしてなぜ三人の息子たちの対応が別れたのか、「第三変奏曲」の演奏者たちは疑問に思わなかったのだろうか。もしそうであるとすれば、文学的感受性の欠如した「非文学的姿勢」と言わねばならない。

第一変奏曲と第二変奏曲の演奏者たちは、少なくともその疑問に対して解答しようとした。第三変奏曲の演奏者たちは、それらの「解答の発見方法」を「証明不可能」ないし「捏造」と理解し、誤謬に満ちた解答を振り回すよりは「解答しない」方が誠実な研究姿勢だと判断したのである。しかし、本当にそうなのだろうか。「間違った結論を出すことを恐れて何も言わない」のは、ある意味で卑怯であり、ある意味で「非文学的」な姿勢なのではなからうか。文学というのは、そもそも証明不可能なもの、あるいは不可視のものを飼ひ馴らすという強引で牽強附会な営為なのではあるまいか。

書かれてあることを書かれてある通りにしか読まない姿勢によって喪失してしまった「文学性」の復権に向けて、今何が望まれているのか。それを明らかにすべく。別の『伊勢物語』の章段を読んでみることにしよう。

3 「狩の使」の主題による三つの変奏曲

次に、『伊勢物語』の中でも最も純粋で最も悲劇的な出来事を語っている六九段が、これまでどのように読まれてきたのか、その歴史をたどっておきたい。原文を「主題」として位置づける。第一変奏曲は中世初期の演奏、第二変奏曲は中

世後期の演奏、第二変奏曲が近現代の読み方である。

3・1 主題の提示

昔、男ありけり。その男、伊勢の国に狩の使に行きけるに、かの伊勢の斎宮なりける人の親、「常の使よりは、この人よくいたはれ」と言ひやりければ、親の言なりければ、いとねむごろにいたはりけり。朝には狩に出だし立ててやり、夕さはり帰つて、そこに来させけり。かくて、ねむごろにいたつきけり。

二日といふ夜、男、われて「逢はむ」と言ふ。女も、はた、いと逢はじとも思へらず。されど、人目しげければ、え逢はず。使さねとある人なれば、遠くも宿さず。女の閨近くありければ、女、人をしづめて、子一つばかりに、男のもとに來たりけり。男、はた、寝られざりければ、外の方を見出だして臥せるに、月のおぼろなるに、小さき童を先に立てて人立てり。男、いとうれしくて、わが寝る所に率て入りて、子一つより丑三つまであるに、まだ何事も語らはぬに帰りにけり。男、いと悲しくて、寝ずなりにけり。

つとめて、いぶかしけれど、わが人をやるべきにあらねば、いと心もとなく待ちをれば、明けはなれてしばしあるに、女のもとより、詞はなく、

君や来しわれや行きけむ思はず夢かうつつか寝てか覺めてか
男、いといたう泣きて詠める、

かきくらす心の闇にまどひにき夢うつつとは今宵定めよ

と詠みてやりて、狩に出でぬ。野に歩けど、心は空にて、今宵だに人しづめて、いとく逢はむと思ふに、国の守、斎宮の頭かけたる、狩の使ありと聞きて、一夜、酒飲みしければ、もはら逢ひごとくもえせで、明けば尾張の国へ立ちなむとするほどに、男も人知れず血の涙を流せど、え逢はず。

夜やうやう明けなむとするほどに、女がたより出だす盃の皿に、歌を書きて出だしたり。取りて見れば、

徒歩人の渡れど濡れぬえにしあれば

と書きて、末はなし。その盃の皿に続松の炭して、歌の末を書き継ぐ。

また逢坂の関は越えなむ

とて、明くれば尾張の国へ越えにけり。斎宮は、水尾の御時、文徳天皇の御女、惟喬の親王の妹。

以上である。この章段の最大の眼目は、三日間という限定された日程の中で、

業平と斎宮の間に「男女関係Ⅱ実事」があったのか、という点である。「子一つより丑三つまであるに、まだ何事も語らはぬに帰りにけり」と、表現に明示してある。この表現は、はたして信用できるのか。この深夜の三時間に、二人の間に何があったのか。

さらには、斎宮の「親」は、なぜ業平を親切にもてなすように娘の斎宮に言つてよこしたのか、その経緯が読者としては是非とも知りたいところである。詮索好きな読者ならば、二人の秘密を目撃したはずの「小さき童」の実名や、この童のその後の人生について興味をそそられるに違いない。

「これらの謎の全部に答える必要は、毛頭ない」と考えれば、一気に第三変奏曲へと飛んでしまふ。「人間の発する言葉には限界があり、真実のすべてを言っておせられないし、場合によっては真相の逆を言葉として定着させねばならない時もある」と考えれば、第一変奏曲がでかあがる。

人間精神は、第一変奏曲から第三変奏曲へと合理化してゆき、文学精神は、第一変奏曲から第三変奏曲へと希薄化してゆく。「研究」は、どのレベルまで達すべきなのだろうか。そして、どのレベルに留まるべきなのだろうか。

3・2 第一変奏曲（『冷泉家流伊勢物語抄』）

中世前期の注釈書である『冷泉家流伊勢物語抄』の説くところを、現代語訳として以下に示すことにする。小見出しを付してある。

3・2・1 登場人物と時と所

在原業平という男がいました。その男が、清和天皇から「狩の使」の勅使に任命されまして、伊勢の国の伊勢神宮に向かつて都を出発しました。時に、貞観十五年の五月二日のことでした。五月五日に、この狩の使のクライマックスである儀式が執り行われることになっています。伊勢大神宮の御狩野で鷹狩りをして、捕った獲物を神々に供える儀式なのです。狩が付き物の勅使なので、「狩の使」と呼んでいるのです。

この業平が狩の使に立った時の伊勢の斎宮は、恬子内親王とおっしゃる方でした。文徳天皇の第二姫宮で、母上は三条町と通称されていた紀静子です。文徳天皇のお后で、恬子内親王の継母に当たるのが、染殿の后と呼ばれている藤原明子です。染殿の后は、在原業平と秘密の男女関係にありました。そういう関係で、彼女は継子の斎宮に対して、「いつもの勅使とは違って、この男の人は大切にお

もてなししてさしあげなさい」という内容の手紙を送っていたのです。これは染殿の后にとって業平が「密夫」だというだけの理由からではなく、彼が阿保親王の子ともであるという血筋でもあるからなのです。

継母の命令ですから、斎宮は言うことを聞いて、業平をたいそうもてなしました。鷹狩りは田野で行われますから、男は朝になったら館を出発します。その出で立ちの支度をしてあげたのです。そして夕方になると再び館に戻ってくるのですが、斎宮は男を自分の館に來させて、そのまま泊めてあげました。このように、斎宮は心をくだいて、業平をいたわってあげたのです。

3・2・2 二人の愛は罪の子を誕生させてしまった

男が斎宮の館に來てから二日目の夜、業平は斎宮に向かつて、「たいへんに無理なお願いですが、どうしてもあなたと逢いたいです」と言いやりました。五月二日に業平が都を出たと申しましたが、彼は三日に伊勢に到着しています。狩の使の全部の日程は三日間ですから、二人が逢おうとしたのは、五月四日の夜のことだったのです。また、二人が実際に逢った場所は、斎宮の館ではなくて、祭の際に斎宮がお泊まりになる外宮の一室だったという噂もあります。けれども、斎宮の館というのが、一般的な伝承です。

業平が斎宮に「逢いたい」と申しますと、女の方も「逢いたくない」とも思いませんでした。けれども、館の中には人目が多いことですから、そう簡単に結ばれることはできません。業平は良い器量をした素晴らしい勅使ですから、斎宮は彼を自分の寝室からそう遠くへは泊まらせてはいませんでした。二人の寝室の距離は、そう離れてはいなかったのです。

女は、配下の女房たちに「明日は早いから、もう休むように」と言って寝かせてから、行動に移りました。午後十一時をちよつとばかり過ぎた頃、彼女は大胆にも男の寝室を訪れたのです。男の方はと言いますと、彼も悶々として寝られないままに、外を眺めながらぼんやりと横になっておりました。ふと気づくと、おぼろな月の中に、たった一人だけ童女をお供に連れて、斎宮が立っているではありませんか。

五月四日の午後十一時過ぎの空に、「おぼろな月」がかかるものなのか、疑問にお感じの読者もおられることでしょう。実は、これには秘密の伝承があるので。いずれ、機会があれば、なぜ「朧月夜」でなければならなかったのか、そのわけをお話することもあります。もう一つ、詮索好きの読者のために種明

かしをしておきますと、この時斎宮が連れていた童女は、「よびとの前」と言うのです。漢字では、「喚戸の前」と書きます。斎宮には、二人の童女がお仕えしています。一人は、斎宮が部屋に出入りする際に戸を開閉する役目でして、それが「喚戸の前」です。もう一人は、お供えを杉の葉に盛って大神宮に奉る役目でして、それを「杉子」と言います。この時の「杉子」の役職にあったのは、大和の守・藤原継蔭の娘でして、のちに成人して伊勢という名前の女性歌人になりました。そして、在原業平の最後の妻として、彼の臨終を見取ることとなりました。業平と伊勢とは、この時点で既に接近遭遇していたのです。ただし、斎宮が密会に連れていった童女は、この杉子ではなくて、喚戸の前の方だったのです。

斎宮を見た業平は、うれしくてたまりません。彼は女の手を取って、自分の部屋へといざないました。そして、あつと言う間に、別れの時間となってしまうしました。それが、午前二時をちよつとばかり過ぎた頃のことでした。

おおよそ三時間が、経過したことになります。この三時間に、男と女の間はなかつたと推測する人も、ごく少数ではありますが存在するようです。けれども、この三時間の間に、たつた一度の関係ではあつたものの確かに実事があつて、何と斎宮が業平の子どもを身ごもってしまったのだということが、大多数の理解なのです。斎宮は、業平が帰京したあと懐妊に気づきます。そして臨月になると、病氣になったと口実を作つて松本の御所に移りました。そして、秘密裏に業平の子を産み落としたのです。人目に触れないようにこの子を人に預けて養育したのですが、三歳になった時に、高階茂則という貴族の養子として縁組させました。このようにして、在原業平と伊勢斎宮（恬子内親王）の間の秘密の罪の子は、高階師尚という人物になりお世話なのです。

業平は、斎宮が自分の寝室に引き上げたあと、悲しくなりません。結ばれた喜びよりは、別れた悲しみの方が大きかったのです。とても眠る気にはなれず、朝までずっと起きていたということです。

3・2・3 喚戸の前という童女

朝になりました。男と女が初めて結ばれた翌朝には、「後朝あとあさ」と言って、女の家から帰つていった男の方が、女に和歌を贈る約束になっていきます。けれども昨日は、女性である斎宮が男のもとを訪れて帰つていったのですから、彼女の側から和歌を贈ってくるはずなのです。業平は、自分の側から後朝の手紙を贈ることができずに、待ち遠しくなりません。すると、明るくなってなおもだい

ぶ時間が経ってから、手紙がもたらされました。手紙を持ってきたのは、昨夜の童女である「喚戸の前」です。その手紙には、散文の言葉は何もなく、ただ和歌だけが一首書かれておりました。

君や来しわれや行きけむ思はず夢かうつつか寝てか覚めてか

この歌の意味は、「わずか三時間ばかりの短い逢瀬でしたから、わたしだけでなくあなたも、さぞかし夢のような気持ちがしていることでしょう。現実には結ばれたのだという実感が、ほとんどわからないことです」ということです。

男は、その歌を読んで、たいそうこみあげるものがありましたので、涙をこぼしつつ歌を返しました。それは、

かきくらす心の闇にまどひにき夢うつつとは今宵定めよ

というものでした。この業平の歌は、『古今和歌集』では、最後の句が「よひと定めよ」となっております。こちらの方が、本当のかたちなのです。というのは、「世人（よひと）定めよ」という表の意味の他に、「昨夜斎宮のお供をして来た喚戸（よびと）の前よ、さぞかしお前ならば、昨日の出来事が現実だったのかそれとても夢だったのか、はっきりし見届けていたであろう」という裏の意味が含まれることになるからです。

3・2・4 別れの朝

いよいよ業平の狩の使の最終日である三日目です。五月五日の早朝のことになります。伊勢の内宮と外宮との中間くらいの地点に宇治という土地があり、そこが狩の場所なのです。この宇治の野原を歩いていても、業平の心は完全に上の空です。今日が最後の滞在になるのですが、その今宵だけでも、祭りの儀式が終わる次第に、周りの者たちを早く寝静めて、早く斎宮と逢いたいものだ、そのことばかり考えています。

ところが、運命は彼ら二人に味方しませんでした。斎宮に仕えている二人の童女のうち「杉子」（後の女性歌人・伊勢）の父親が藤原継蔭という名前であることは既にお話ししましたが、その継蔭こそが現在の伊勢の国の守であり、斎宮の長官を兼任しておりました。狩の使の勅使であり、親王の子でもある噂の美男子・在原業平がせっかく当地を訪れたのですから、彼を接待しようという好意から、一晩中夜が明けるまで酒盛りの宴会を挙行したのです。

もはや、業平と斎宮とが二人だけになって密会することは、不可能となりました。夜が明けはなれますと、勅使一行は鈴鹿山を越え、尾張の国と美濃の国とを

通過してから上洛する旅に上らなければなりません。その出発に際して「別れの杯」が、斎宮方から業平に差し出されました。その杯の皿に、字が書いてあるのが業平の目に映りました。それは、

徒歩人の渡れど濡れぬえにしあれば

というものでした。これは、「五七五七七」の和歌の上の句だけで、下の句が欠けていますから、斎宮は業平に向かって、「下の句を付けてください。そうして、二人の共同作業として連歌を完成させましょう」とこっそり申し出たことになりました。

周囲の目がありますから、二人の連歌には表と裏の二通りの意味があります。斎宮の歌は、「徒歩で川渡りする人が、水で濡れないような浅い入り江でした」という表の意味の裏に、「わたしたちの愛は、たった一度きりの浅い浅い御縁でございました」という裏の意味が重ねられています。

その杯の皿に、業平は松明の消え残りの炭を手にして、下の句を書き付けました。これによって、歌が書き継がれて連歌が完成したのです。それは、

また逢坂の関は越えなむ

というものでした。二日目の夜に業平と斎宮の関係があったという立場を取らない人々は、この歌を「今回の訪問では結ばれませんでした、またいつかお目にかかってその時には結ばれたいものです」と解釈しているようですが、それは誤りです。正しくは、「今回は一度きりの密会でしたが、わたしがこれから越える逢坂の関にちななくて、また再び逢瀬を持ちたいものです」という意味なのです。ただし、何も知らない女房たちや役人たちには、単に、狩の使の一行が、往路で越えた逢坂の関を復路でもう一度越えるのだ、というくらいの意味に理解したことでありましょう。業平は、女性である心弱い斎宮に、またきつと逢えますよと、慰めの言葉をかけたのです。そして、業平は伊勢の国を出立して、尾張の国へと国境を越えていったのでした。

この出来事の種明かしは、もう明らかですので完結に済ませます。斎宮は、清和天皇の御代の斎宮であった、文徳天皇の息女・恬子内親王のことです。業平が個人的にお仕えしていた惟喬親王の妹君に当たられるお方です。

なお、伊勢斎宮の地理的な説明は、省略させていただきます。また過密スケジュールを解消するための方便として、祭りの勅使たちが現実の一日を、仮に二日や三日に該当するものと想定して、短い期間に儀式を集中的に挙行する慣習があることなど、もっと説明しなければならぬ点も多いのですが、今日のところはこ

れまでで失礼させていただきます。

3・2・5 解説

業平は、斎宮と男女関係を発生させ、その結果「罪の子」が誕生した、とされている。「子」つまり丑三つまであるに、まだ何事も語らはぬに帰りにけり」という表現は、まったく信用できないというのだ。そして、斎宮の「親」を「継母」としているのも、特色がある。しかも、業平は斎宮とだけでなく、その継母である染殿の后とも男女関係を持っていたというのだから、複雑怪奇である。

斎宮に仕える「童」に、「喚戸の前」「杉子の前」という名前を当てたのは、挿入されている和歌の解釈とも密接に関連している。かなり強引な説明ではあるものの、さまざまな謎に答えようとする誠意が見える。ただし、この第一変奏曲の「語り口」は、すべての真実を知っているという全知の視点から、無知の読者を教えさすというものである。だから、読者の側に「全知全能」である語り手に対する不信任感が懐胎すれば、この第一変奏曲はたちどころに「うさん臭い僻説」になってしまうことになる。そして、それは実際に起きた。

3・3 第二変奏曲（『伊勢物語閑疑抄』）

戦国時代末期の武将・細川幽斎は、古今伝授を受けた歌人・国文学者でもあった。その細川幽斎のまとめた『伊勢物語』に関する注釈書を基として、彼がイメージしていた『伊勢物語』像をここで紹介しておきたい。中世的な第一変奏曲と、近代的な第三変奏曲とをつなぐ中間的な変奏曲である。ある意味でどっちつかずの凡庸さ、ある意味で穏当な中庸性を持った解釈であると言えよう。

ここでも、現代語訳したかたちで示し、小見出しを付す。注釈書の基本的文体は、独特な「問答体」であって、物語的なナレーションとは大きく異なるけれども、注釈書が「幻視」していた『伊勢物語』を復元・再現するために、あえて物語的な文体による現代語訳としたのである。

3・3・1 伊勢と尾張の巡察使

「狩の使」とは、任期四年の国司が正しく任国を治めているかどうかを、鷹狩りにかこつけて視察するために派遣される勅使のことです。在原業平は、このたび伊勢と尾張の両国の視察を命じられたのでした。

伊勢国には、斎宮があります。この時の斎宮は恬子内親王でした。彼女の継母

に当たる染殿の后から、「今度の勅使の在原業平は、わたしの個人的な家来ですから、とりわけよく面倒をみてやってください」と言われたものですから、斎宮も業平のことを気にかけてあげたのです。

業平が伊勢国に下向してきてから二日目の夜、彼は斎宮に「無理なことだとは思いますが、どうしてもあなたと逢いたいのです」と言い出しました。斎宮は、まだ幼い少女時代からこの斎宮という職につかれましたので、もちろん男の人と関係したことはありませんでした。そもそも男の人との交際については何の予備知識もない、それこそ「うぶ」な状態だったのです。

3・3・2 春の朧月夜のように、事の真相は不明

頃は、春の二月、遅くとも三月であつたと思われれます。春の朧月夜が空にかかっています。業平がぼんやり月を眺めていると、斎宮が童をつれてやってきたではありませんか。この時、子の一刻から丑の三刻まで、二人は同じ部屋の中にいたのです。二人の間に、男女の関係があつたのかどうか、それははっきりしないのですよ。ただし、世間の口さがない人達が噂しているように、何かあつたのかもしれませんね。詳しいことは、誰にもわからないのですよ。

業平は斎宮が帰ったあと、女の方からくる「後朝」の手紙を待っているうちに、夜が明けてしまいました。やっと待ちに待った女の歌が届けられました。

君や来しわれや行きけむ思はず夢かうつつか寝てか覚めてか

この歌には、『莊子』の胡蝶の夢の故事が踏まえられているようです。蝶になつた夢を見た莊子は、「自分」が蝶になつた夢を見たのか、それとも蝶の方が見ている夢の中の人物こそが「自分」なのか、わからなくなりました。斎宮も、一夜の出来事のととで、何が現実で何が非現実なのか、区別がつかなくなつてしまつたのです。業平は、この歌を読んで茫然としてしまいました。次には、さめざめと涙がこぼれてきました。そして、

かきくらす心の闇にまどひにき夢うつつとは今宵定めよ

という歌を返したのです。この歌は、今宵になれば夢か現実なのかはつきりいたしますよ、という意味です。ところが、その夜、伊勢の国の国司で斎宮寮の長官を兼任している役人が勅使接待の宴会を開催したために、もはや逢うことはできなかつたのです。狩の使が滞在できる日数は最初から決まっていますし、次の視察地である尾張の国へと出発しなくてはならないからです。この時、業平は血の涙を流して悲しんだのですが、女の斎宮の方も彼と同様に心をかきむしられるよ

うだったのです。最初は男と女の間柄のことには無関心だった斎宮も、たった三日間の業平との出会いと別離を通して、「恋」の道が何であるかをお知りになったようです。引き裂かれる二人の相聞は、

徒歩人の渡れど濡れぬえにしあれば

また逢坂の関は越えなむ

という連歌に反映しています。昨今世情で大流行している連歌形式は、この業平と斎宮の連歌を一つの起源としているのでしよう。今回は浅い縁で終わってしまったけれども、もし斎宮が上京されたらまた逢うこともありましよう、と業平が斎宮を慰めているのです。これが、三日間の短かった恋の顛末です。

3・3・3 解説

斎宮の「親」を継母の染殿の後としているのは、第一変奏曲と同様である。また、業平と斎宮の間に「実事」があつたかどうかはわからないと言いがら、うぶな斎宮の「恋の体験」による成熟という視点を明確にしているのです。どちらかと言えば「実事」はあつたという立場に傾いているとは見なしうる。ただし、「子」つまり三つまであるに、まだ何事も語らぬに帰りにけり」と表現に明示してある限りは、正面切つてそれに異を唱えることを憚っているのであらう。ここには、「表現解釈学」としての「研究」の視点も、明瞭に存在している。

巡察使として「狩の使」を位置づけるのは、戦国大名として領民に対して「善政」を施しつつ、平和な時代の到来を待望する為政者の心が反映しているのかもしれない。そういう意味では、文学が文学として独立していず、政治と文学と宗教が渾然と一体化していた古代・中世的な思考様式が残存している。

行き詰まった「文学研究」が回顧すべきは、あるいはこのような細川幽斎たちの生きた戦国末期から江戸初期にかけて一連の注釈書の姿勢なのかもしれない。そこには、「読書」と「研究」がまだ未分化だった時代の「文学の可能性」が残っている。

3・4 第三変奏曲（高等学校古文教育バージョン）

六九段をめぐる変奏曲の最後に、現代の学校教育における定番的な解釈を紹介しよう。未成年者への「道徳教育」という場を考慮したためか、二人の男女の間には何事も起こらなかったという平板な説明がなされることが多い。それは、「まだ何事も語らぬに」という本文の表現をそのまま真に受けてしまったから

でもある。

人間は、平気で嘘をつくこともあるし、嘘というかたちで本当の気持ちを相手に打ち明けることもある。まして、文学では、何が真実で何が嘘かわからない虚々実々の駆け引きが展開される。だから、「書かれてあることを書かれてある通りに読んだ」としても、文学の真実に触れたことにはならない場合がある。ここでは、どうなのだろうか。

3・4・1 男の名前は「在原業平」でなくともよい

昔、ある男がいました。その男が伊勢の国の狩の使に行くことになったところ、伊勢の国に滞在している斎宮の実の母親が、「ふだんの使者よりはねんごろにもてなしなさい」と都から言つてよこしました。親の口添えなので、女は、朝には支度して鷹狩りに出発させたり、夕方には鷹狩りから戻った男を自分の居所に招いたりして接待したのです。というのは、斎宮の母親の姪がこの男の妻であるという姻戚関係にあつたからです。

二日目の夜、男は強引に「あなたと逢いたいです」と言いました。女の方でも、「逢いたくない」とも思いませんでした。けれども人目が多いので、逢うことができなかったのです。

3・4・2 二人は深い仲にはならなかった

男は歴とした勅使で、それも一行の中では一番偉かったので、斎宮寮の中でも斎宮の居場所に近いところに寝泊まりしています。女は何とか女房たちを寝静めてから、子の一刻ばかりに男の部屋にやってきたのです。男の方でも眠れずに悶々として、ぼんやり外を眺めていたところ、臘月夜の中に小さな童だけ連れられて恋しい斎宮が立っているではありませんか。男はともうれしくて、自分の寝室に女を連れて入りました。それが子の一刻のことで、それから丑の三刻まで二人は一緒にいたのです。けれども、満足に話をすることもなく、あつと言う間に女は帰ってしまいました。むろん、男女の関係などは、毛頭あるはずがありません。

男は悲しくて、とても眠るどころではありません。翌朝、自分の気持ちを歌にして女に届けたいのはやまやまながら、自分たちの心の交流が露見しては危険です。それはできません。女が今どんな気持ちなのかわからずにじれていましたら、やつのことで女から歌が来しました。

君や来しわれや行きけむ思ほえず夢かうつつか寝てか覺めてか
男は、ひどく泣きながら返事を書きました。

かきくらす心の闇にまどひにき夢うつとは今宵定めよ

今夜に期待しながら狩に出かけたのですが、野を歩いていても心はうつろでした。今夜こそ早く人を寝静めて女と逢いたいものだ、そればかり考えていたのです。それなのに、国司で斎宮寮の長官を兼任している無骨な男が、都から狩の使が来たというので、一晩中宴会を張ったのですから、もう逢う算段もできなくなっていました。朝になったら尾張の国へ出発しなければならぬので、男は人知れず血の涙をこぼしますが、いかんともしがたかったのです。まもなく夜が明けるといふ頃、女の方から差し出す盃に、見れば歌が書き付けてありました。男が手にとって見ると、

徒歩人の渡れど濡れぬえにしあれば

と書いてありました。下の句がありませんでしたので、その盃に松明の炭で男が書き付けたのです。それは、

また逢坂の関は越えなむ

というものでした。そして、明け離れてしまったので、男は尾張国へ出発したということです。この女は、清和天皇の御代に斎宮であつた人です。文徳天皇の内親王であり、惟喬親王の妹に当たられる方だということです。

3・4・3 解説

この第三変奏曲を読んでいると、どうにもどこかしい。じれったい。かゆいところ、手が届かない感じがする。一方、第一変奏曲は、かゆいところはすべて掻いてくれており、やや掻きむしりすぎて血がにじんでいる。第二変奏曲は、ちょうどよい程度にかゆいところを掻いてくれている。

文学の読みというものは、必ずしも第三変奏曲のように、杓子定規でなくともよいのではないだろうか。近現代の文学観も解釈方法も、時代が要請したものでしかなく、絶対的な真実なのではない。

例えば、「昔、男ありけり」とある「男」は、「実名が書かれていないからには、誰であつてもよい」という基本的姿勢でありながら、すぐに矛盾を発生させて馬脚をあらわしている。「斎宮の親」に関しては、第一変奏曲と第二変奏曲の「継母」染殿の「后説」を覆して「斎宮の実母説」を唱えるが、これは歴史的事実として、在原業平の妻とされる紀有常の女が、斎宮（＝恬子内親王）の母親（＝紀静

子）の姪に当たるからである。これは、「男」が在原業平その人でなければ絶対に成立しえない立論である。その結果、「昔、男ありけり」の「男」に関して、「本来は誰であつてもよいのだが、在原業平のイメージを濃厚に帯びる誰か男の人である」という、訳の分からない説明をしなければならない羽目に陥る。また、『伊勢物語』の主人公である「男」に関して、「誰でもよい」という基本姿勢でありながら、物語に含まれる男の歌が『古今和歌集』で「在原業平」の作とされていたら、「この段の男は在原業平その人である」などと、掌を返したりする。

最大の問題は、業平と斎宮の関係を「プラトニックな純愛悲劇」と読んだことだろう。ここには、明治時代以降に大挙して欧米から流入した長編の「教養小説」人格形成小説にお定まりの青年の悲恋という発想様式に毒された痕跡はないだろうか。少なくとも、高等学校でこの第三変奏曲を学習した青年子女は、ゲーテの『若きウェルテルの悩み』などこの『伊勢物語』六九段を重ね合わせて理解してしまうのではなからうか。それは、中世初期から、業平と斎宮との間に実事がなかったという立場を唱える人々がいたということは、まったく別次元の解釈になつてしまっている。

王朝文学である『伊勢物語』を現代的に読むことの困難さについて、さまざまのことを考えさせてくれるのが、この「狩の使」であつた。

4 「世のありさま」の主題による四つの変奏曲

これまで見てきたように、「伊勢物語」はそれぞれの時代によって読まれ方が一変してきた。ここでは、比較的短い二一段の文章を取り上げる。「本文」主題を先に明示してから、その変奏曲に耳を傾けてみよう。

4・1 主題の提示（原文。ただし、前半のみ）

昔、男女、いとかしこう思ひかはして、異心なかりけり。さるを、いかなることにかありけむ、いささかなることにつけて、世の中を憂しと思ひて、出でていなむと思ひて、かかる歌を詠みて、物に書きつけける。

出でていなば心かるしと言ひやせむ世のありさまを人は知らねば

と詠み置きて、出でていにけり。この女、かく書き置きたるを、けしう、心置くべきことも覚えぬを何によりてかかからむと、いという泣きて、いづかたに求

めゆかむと、門に出でて、と見かう見、見けれど、いづこをはかりともおぼえざりければ、帰り入りて、

思ふかひなき世なりけり年月をあだに契りてわれや住まひしと言ひてながめをり。

このあとで、男を忘れられない女と、女を忘れられない男が歌の贈答をし合うが、結局二人は別れてしまうことになった。この後半部分は、省略する。原文を引用した二一段の前半部分を取り上げて、さまざまな解釈を味読したのである。男女が仲睦まじく暮らしていたのに、片一方が家を出てしまったのには、どういう経緯があったのだろうか。そして、この男女の実名は誰々なのだろうか。読者にとっていろいろと想像力を刺激される設定である。

また、「出でていなば」の歌のあとにある「この女」という主語は、どこにかかるのか、一瞥しただけではわかりにくい。「この女が『出でていなば』の歌を書き置いて出ていった」とも読めるし、「この女は、(男が)『出でていなば』の歌を書き置いて出ていったのを、けしう(＝不思議なことだと)思った」とも読める。前者ならば、家を出たのは女であるし、後者ならば家を出たのは男のこととなる。どちらが、文脈と主題にとってふさわしい解釈なのだろうか。

4・2 第一変奏曲 (『和歌知頭集』)

4・2・1 業平と紀有常の女

昔、在原業平と紀有常の女が夫婦として暮らしていました。彼らは相思相愛で、限りなく深く愛し合っていたのですが、ほんのささいなことが原因で心と心が離れてしまったのです。業平と並び称される天下の色好みに、源至という人物がいたのですが、どういうはずみでか、紀有常の女はこの源至と関係を持つてしまったのです。業平は、この妻の裏切りの事実を知って大変につらく思いました。そして、自然と彼女の家から足が遠のいてしまったのです。けれども、女が「もう二度と源至とは逢いせんから、わたしの家に通ってきてください」と誓いましたので、男の心は少しづつなだめられたのです。

4・2・2 家を出たのは男の方

ところが、業平が外出先から急に帰ってきてこっそり妻の様子を覗き見てみま

すと、有常の女はかつて源至からもらった手紙を広げて、いかにもなつかしうに読み返しているではありませんか。業平は、「彼女はやはり源至のことが忘れられないのだろう」と思いました。そして、妻にその旨を告げて、その夜ただちに妻の家を出奔してしまったのです。その時の悲しい業平の気持ち、次の和歌に籠められているのです。

出でていなば心かるしと言ひやせむ世のありさまを人は知らねば

4・2・3 解説

この変奏曲では、男に在原業平、女に紀有常の女の名前を、それぞれ当てはめている。そして、女の家が男が通うという「妻問い婚」を前提として、この二一段を解釈している。妻問い婚が消滅するのには、二つの原因がある。一つは、男が妻以外の愛人を作ってそちらに入り浸り、自然と前の妻の家から足が遠のく場合。もう一つは、男が自分の留守中に妻のもとへ別の男が通ってきているのを知って、訪問を途絶する場合。前者は、『伊勢物語』二三段(筒井筒)で使用されているし、後者は、『伊勢物語』四二二段(誰が通ひ路)などがある。また、『源氏物語』帚木巻の「雨夜の品定め」に登場する「木枯の女」なども、後者に分類されよう。

この第一変奏曲では、「妻の浮気に絶望した夫が家を出た」という解釈が示されているわけだ。「世の中(夫婦関係)」を「憂し」と思ったのは、男の側だったというのだ。『伊勢物語』という作品を、恋ゆえに苦悩する男の心理の詳細な分析として把握した結果だったのかもしれない。

4・3 第二変奏曲 (『冷泉家流伊勢物語抄』)

4・3・1 女の名前は小野小町

昔、色好みで有名な在原業平と、これまた色好みで名高い小野小町とが、夫婦で暮らしていました。常盤の里で、仲むつまじい暮らしぶりだったのです。ところが、二人の間に争いごとが発生してしまいました。小町は、夫の業平が多くくの女性をいまだに愛していて、自分ひとりだけに愛情が定まっていけないのを心に深く恨み、実際にその不満を口にします。けれども一方の業平も、妻の小町が多くくの男性を愛していて自分一人だけを愛してくれないという不満を抱いていたのです。このいさかいは、根が深くてなかなか決着が付きません。

4・3・2 家を出たのは女

小町は、とうとう業平を恨んで共に暮らした常盤の里の家を出る決心をしまった。彼女は、「業平ほどの人を捨てて自分が出奔したら、事情を知らない他人は、わたしのことを薄情な女だと思えばん非難するにちがいない。しかし、わたしは業平様がわたし以外の女性のことをあれこれと思っておられるのに耐え切れないだけなのだ」と考えていたのです。そしてその旨を、和歌に書き付けておいたのです。それが、

出でていなば心かるしと言ひやせむ世のありさまを人は知らねば

という歌です。都の七条に兄にあたる大江盛時が住んでいましたので、小町は彼を頼って出ていったのです。業平は、突然小町がいなくなってしまったので、門に出てあちこち探したのですが、とうとう彼女を見つけないことができなかったのです。

4・3・3 解説

第一変奏曲と比べると、「女の側の一方的な浮気」から「男女双方の浮気」へと複雑化されている。そして、思い余って家を出たのを女の方にしている。これによって、「女の絶望」と「女を突然に失った男の茫然自失」とが浮かび上がった。

『伊勢物語』四段（月やあらぬ）では、純愛関係にある男女が運命の力で突然に切り裂かれ、男が茫然自失するのだが、この二一段の第二変奏曲では、「夫婦」という関係に必然的に潜む「愛の信じがたさ」と「相互信頼の困難さ」とが加味されているので、苦い読後感が残る。

4・4 第三変奏曲（『伊勢物語難義注』と『曾我物語・巻五』）

『曾我物語』は、かつては『忠臣蔵』と並ぶ仇討ち物の人気作品であった。曾我五郎と十郎の兄弟の仇討ちのストーリーに付随して、それとは無関係なさまざまのエピソードが語られている。その中に、何とこの『伊勢物語』二一段を脚色したエピソードがある。はなはだ面白いので、ここでも紹介させていたきたい。それは、『伊勢物語難義注』という注釈書とほぼ同一であるので、両者をミックスしたような現代語訳をほどこすことにする。

第一変奏曲と第二変奏曲とは、女に別々の名前を代入するものの、名前（固有

名詞）を確定するという基本姿勢を持っていた。第一変奏曲では、「最初からの夫婦」であっても夫が妻の貞操を信ずるのはむずかしいというテーマが提出されていたし、第二変奏曲では、男は業平・女は小町というように「どちらも色好み」の男女が夫婦となった場合には心の修羅が発生してしまうというテーマが提示されていた。女の実名は、二一段の主題がこうあるべきだという文芸的な立場からの代入なのである。

この第三変奏曲でも女の正体が示されるが、今までにない物語的な解釈である点が斬新である。

4・4・1 業平と謎の女

昔、在原業平という男がいました。彼は、いつも姿形が美しい女性を妻としたものだということばかりを考えていたのです。ある時、彼は伏見の山荘から都へ戻る途中で、木幡山のあたりで上品そうな女と行き合いました。業平はさっそく彼女と言葉を交わして、仲良くなることに成功しました。そして都の自分の家に彼女を同伴して、夫婦として暮らすことにしたのです。

こういうふうにして出会った二人は、しばらくは楽しく暮らしていたのですが、しばらくして突然に女がいなくなってしまうのです。業平は、「いったいどうしたことだろう。もう一度戻ってきてほしいものだ」と恋慕ものの、女の名前も家も知らないのですから、どうしようもなかったのです。女がいつも座っていた場所を見ると、彼女の書き置きがみつかりました。それは、

出でていなば心かるしと言ひやせむ世のありさまを人は知らねば

という和歌でした。「わたしの本当の姿を業平様はお知りにならないので、今回の突然の家出に關しても、さぞかしわたしの心軽さを批判しておられることだろう」という意味です。業平は、「女が出ていったのには、何か子細があるようだ」と直感しました。

4・4・2 女の正体は狐だった

それからしばらく経ったある日の夕暮れのほど、古びて色あせた狐色の服を来た女が一人で業平の家をたずねて来て、ぱんと手紙を置いたのです。見ると、一緒に暮らしたあの女の筆跡でした。そこには、

今はとて忘れやすらむ玉鬘たまかづら面影にのみいと見えつつ

という歌が書いてありました。その意味は、「わたしはあなたが憎くて出てい

(1997年12月)

たではありません。けれどもあなたの方では、わたしのことなどとうにお忘れになったことでしょうね。わたしは業平様のことを思いつづけて、あなたの幻を見てしまうようなありさまなのですよ」ということです。使いの女は、業平から返事の和歌をもらうと、帰途につきました。

男は、女の手紙を持って来た謎の女のあとを追跡することにしました。すると不思議なことに、女が来ていた服の色が、都から遠のくにつれてだんだんと薄くなってゆくではありませんか。女は、かつての思い出の場所である木幡山の奥へ入ってゆきました。業平は、いよいよ不思議さを痛感したものの、引き続き追跡します。使いの女は、古いお墓の並んでいる中に、塚があるところへとたどりつきました。あたりには年を取った狐や若い狐などがたくさん集まっています、業平からの返事の手紙を見て、皆でさめざめと泣いているのです。

ややあつて業平のいる気配がわかったのでしょうか、狐たちはすべて人間のかたちになってしまいました。これまでお墓と見えていたのも、立派な御殿へと変貌したのです。その御殿から、若い女が出て来て、「どうぞ中へお入りください」と言ったのを見れば、恋しいあの女ではありませんか。女は業平を種々の趣向でもてなして、「今宵はここにお泊まりください」と言いましたので、業平は一泊することにしました。女の立ち居ふるまいや言葉つきは、かつて一緒に暮らしていた時とまったく変わるところがありません。

朝になりますと、女は業平に、「わたしは、これから故郷に戻ります」と告げます。業平が「あなたの故郷とは、一体どこなのですか」と尋ねますと、「わたしは和歌浦にある玉津島明神の使いの者です。おわかりでしょうか、正体は女狐なのです。和歌の名人として名高いあなた様のことを詳しく知りたいと存じまして、ここまで来てあなたとお近づきになったのです。これからも、こっそり都に出て来て、あなたと逢いたいと思います」と語ります。そして、あつと言う間にかき消すように消えてしまいました。

女が言ったように、この後も業平との関係は、細く長くつづいていたようです。しかし、世間の人は業平と女狐との関係にはまったく気づいていなかったということです。

4・4・3 解説

ここまでくると、独立した物語と言ってもおかしくはない。その証拠に、お伽草子『木幡狐』は、この第三変奏曲と密接な関連を有する誕生をしたと、わたし

は確信している。詳しくは、拙著『伊勢物語の水脈と波紋』（一九九八年、翰林書房）に考証しておいたので、御参照いただきたい。

『伊勢物語』の本文を解釈する姿勢が高ずると、『伊勢物語』を基とする新しい物語の創作の意欲が湧いてくるのである。『伊勢物語』の読者が、新しい物語の作者へと変貌するのは、まさにこの瞬間である。

翻って、考えてみる。「文芸評論家」という肩書の人々がいる。彼／彼女らは、作品の「読者」として出発する。けれども、深く鋭い読書に裏付けされた思索結果は、その作品を基礎とする独創的なアイデアの提示によって、作品と作者を越えた文章へと脱皮してゆく。かくて、独自の創作とも見なしうる「批評」が書き綴られることになる。その「批評」は、読者の心を激しく揺るがし、大きな文学運動を巻き起こさずにはいない。

一方、「研究者」は、最初から自己限定を余儀なくされており、作者と作品を越えることは許されていない。あるいは、「許されていない」と思い込むことで、「批評とは異なる研究」の価値を宣言しようとしている。その結果、何が起きるのか。一生を費やした研究者の長い研鑽は、同類である「研究者」にかろうじて影響を与えはするものの、一般大衆にその成果が知られることはほとんどない。「研究」は、同時代の「文学状況」と切り結ばない。この疎外感から解放されたいと思う研究者は、わたしだけだろうか。

文芸評論家の読みと研究者の読みと、深さにはそれほど差異はない。ただし、得手不得手があつて、文芸評論家には発想の自由さがあり、研究者には手堅い実証力とがある。この二つを同時に兼ね備えた「読書態度」や「文学に処する態度」は、ありえないものだろうか。

『伊勢物語』二二段の第三変奏曲は、創作性が濃厚であり過ぎるために、「理想的な研究姿勢」とは言い兼ねるところがある。しかしながら、「読書」の本来持っている「文学性」について示唆するところが大きい。このような解釈を「荒唐無稽」として斥けるのではなく、なぜこのような解釈が許されるのか、そしてなぜ時代に受け入れられるのか、考慮する必要があるのではないか。

ちなみに、この変奏曲の中に含まれていた「今はとて忘れやすらむ玉鬘面影にのみいと見えつつ」という歌は、「主題の提示部分」で省略した本文に含まれている。「人はいさ思ひやすらむ玉鬘面影にのみいと見えつつ」という和歌を用いたものである。

4・5 第四変奏曲（現代の高等学校古文教育バージョン）

最後に、現代の古文教育の現場における「妥当な解釈」を示しておく。つまりは、国文学研究における有力説ということである。第一変奏曲から第三変奏曲まで読んできた目で、素直にこの第四変奏曲を読んで、「これでよい」と思えば話はそれまでである。

わたしなどには、この第四変奏曲には「反省」すべき点があるように思われてならない。つまりは、面白くなく、味気ないのである。文学の醍醐味が、最も薄れている。「文学教育」と「文学研究」を標榜する一方で、「非文学」を加速してしまう危険性が、ありはしないか。

4・5・1 名前も不明で、場所も不明

昔、男と女が、互いに相手をいつくしみあって、浮気心を持つようなこともなく暮らしておりました。それなのに、どういう経緯があったのでしょうか、ほんのささいなことにかこつて、女は男との暮らしを耐えられないと思うようになりました。それで、自分から家を出て男との関係を断ち切ろうとして、次のような歌を詠んで、物に書き付けたのです。

出でていなば心かるしと言ひやせむ世のありさまを人は知らねば

と詠んで、家を出奔してしまいました。この女が、いかにも男の方に別離の原因がありそうに書いているのを、男は不思議でなりません。自分の方では、女に我慢できないほどの思いをさせたという意識がなかったで、「どうしてこんなことになったのだろうか」と思って、ただ泣くばかりです。女の出で行った場所を探そうとして、自分も門に出て、あちこちと眺めるものの、どこを目当てに尋ねていけばよいものか皆目検討もつかないので、家に戻りました。そして、

思ふかひなき世なりけり年月をあだに契りてわれや住まひし

という歌を詠んだのです。ここには、忍耐力のない女を決して恨まずに、自分自身のことを反省する男のけなげな心が見えるようですね。

4・5・2 解説

「5W1H」の詮索には立ち入らない、表現に書かれていないことはなるべく読まないようにするという方針が、確立している。今示した「現代語訳」は、それでも精一杯こまでは許されるといざりぎりの範囲で「表現の背景」を汲み

取ったものである。実際の教育現場では、もつと無味乾燥な訳が示されて終わっているに違いない。

解釈は、最小限ないし最低限に済ませる。その上で、解釈しきれなかった「文学的感受性」の領域に関しては読者の自由裁量に任せるということであれば、問題はまだまだ少ない。それでも、肝心の「生徒一人一人の文学的感受性の涵養」がほとんどなされていない現状にあつては、書かれたことだけを書かれた通りに解釈する教育は、自滅を待つばかりではないだろうか。教育を支えている研究にも、閉塞した未来が接近している。

第四変奏曲のもたらす「じれったさ」や「もどかしさ」は、本当にどうにもならないものなのだろうか。近代的な文学研究や教育制度が確立する以前の「文学の豊饒な可能性」を再発見することから、新規巻き返しは可能なのではないか。

5 「若紫」の主題による四つの変奏曲

『伊勢物語』の陰翳に富んださまざまな表情を、これまでに確認してきた。レオナルド・ダ・ヴィンチの傑作『モナリザ』は、ほぼ笑みを浮かべた一人の女性のたった一つの表情が、見る人によって異なる感情を惹起させる。『伊勢物語』も、同じ文章でも違う読み取りがさまざまに可能なのである。美しく化粧した顔が「本当の顔」なのか、化粧する前の素顔が女にとっての「本当の顔」なのか、この点からして解釈が別れることだろう。

この論考の最後として、人口に膾炙した『伊勢物語』の巻頭章段を読んでみたい。「文学の（特に物語の）読みは、自由であり豊饒なものである」ということを、確認しておこう。

5・1 主題の提示（原文）

一段は有名でもあるし、かつ短いので、全文を掲載することとしたい。

昔、男、^{うひなふり}初冠して、奈良の京春日の里に^{かすが}しるよしして、狩にいにけり。その里に、いとなまめいたる女はらから住みけり。この男、かいまみてけり。思ほえず、古里にいと^{すそ}はしたなくてありければ、心地惑ひにけり。男の、着たりける狩衣の裾を切りて、歌を書きてやる。その男、信夫掬の狩衣をなむ着たりける。

春日野の若紫のすりごろも忍ぶの乱れ限り知られず

となむおひつきて「おひつきて」「をいつきて」とも、言ひやりける。ついで
面白きことともや思ひけむ。

みちのくのしのぶもぢずり誰ゆゑに乱れそめにし我ならなくに
といふ歌の心ばへなり。昔人は、かくいちはやきみやびをなむしける。

5・2 第一変奏曲（『和歌知願集』）

5・2・1 5Wと1H

仁明天皇の御代のことになりますが、承和八年正月七日、平城天皇の孫にあたる業平王は、在原の姓を賜つて臣籍に下り、初めて右近の大夫の將監という官爵を授かりました。時に、十七歳のことでした。彼本人の所領ではないのですが、母親の伊豆内親王の所領である奈良の京に鷹狩りのために出かけました。同じ承和八年の春、二月二十二日のことでした。

その里には、紀有常の娘たちが、とても優雅な雰囲気です。暮らしておりました。姉は十九歳、妹は十七歳だったのです。この姉妹は、恋愛に憧れる性格があったものと見えて、「宮中でも美男子という評判の貴公子が当地までわざわざ鷹狩りにいらつしたのですから、そのお姿をこっそりと見ようではありませんか」という相談をして、業平を見るために外出していったのです。それを、業平の方でも、こっそりと松の木の下から覗き見てしまったのです。この姉妹は、年若く、ふるまいも優美で、形もうるわしく、かつ恋愛にも好奇心があるというありさまで、足らぬところはないと思われました。

「古い都である奈良に、こんなに素晴らしい女性などいるはずはない」という予想が完全に裏切られて、業平は「いったいどの家の娘たちなのだろう」と不思議に思います。業平ほどの人物ですから、野に出かける時でも筆と紙の用意はあったのですが、自分の心が乱れたのを、ちょうど今自分が着ている信夫摺の文様の狩衣で象徴させたかったのですから、狩衣の裾を切り取って歌を書き付けました。

春日野の若紫のすりごろも忍ぶの乱れ限り知られず

この歌の「若紫」は、美しい姉妹たちのことです。「限り知られず」とは、業平の恋心が切実であるということです。この優美な姉妹たちは業平の鷹狩りを十分に見物してから夕暮れに帰宅したのですが、業平はこの歌を女たちの帰り道に

追いついてから届けたのです。なぜなら、業平には女たちの家のありがたさがわからなかったのですから。

5・2・2 姉妹は歌を返した

美しい姉妹たちは、業平からの歌をもらって、うれしいことこの上もありません。自分たちも業平の姿をたつぷりと眺めて、「本当に素晴らしい男性だったこと。いつまでも見ていたかったので、家に帰りたくはありません」ということで、のろろ帰宅していた途中だったので、男の側からの働きかけを「よいついでだ」と判断したのです。それで、この恋愛を先へ進めるために、自分たちでも歌を詠んで業平に返しました。その女たちの歌の表現は、正確には覚えていませんが、有名な、

みちのくのしのぶもぢずり誰ゆゑに乱れそめにし我ならなくに
という歌と同じような内容だったと思います。「若紫のすりごろも」に対する返事としては、この「みちのくの」の歌の趣旨以外ではありえないでしょうから。昔の人は、男も女も、このような切実な恋心に駆られて、切実なふるまいをしたものなのです。

5・2・3 解説

大変に具体的で、リアルな解釈である。現在でも諸説ある「おひつきて」に関して、男が帰宅する女のあとを追いかけて、追いついてから歌を贈ったとしているのは、それなりに筋は通る。「ついで面白きこと」と思ったのは、歌を受け取った女の側であり、「みちのくのしのぶもぢずり」の歌は、女が男に返した和歌の趣旨であるという解釈は、現在ではまったく顧みられないけれども、『伊勢物語』の名譽ある一段に関して、このような解釈が堂々となされていったという事実、は、『伊勢物語』の本文（＝主題）が作品成立の当初から自明のことではなく、読者による「さまざまな変奏」を要請するものであったことを端的に示している。

男と女の双方の恋への惑溺と他方への働きかけを汲み取ったのが、この第一変奏曲である。

5・3 第二変奏曲（『冷泉家流伊勢物語抄』）

5・3・1 もう一つの5W1H

在原業平は幼名を曼陀羅と言いまして、十一歳の頃から東寺の真雅僧正の弟子だったのですが、十六歳になって元服しました。承和十四年三月二日のことでした。左近の大夫の官爵を賜ったのです。同じ年の三月三日、業平は春日神社への祭礼の勅使として奈良の京に向かったのです。ほかに適当な人材がなかったために、急遽業平を元服させて勅使に仕立てたのです。仮りごしらえの勅使ですから「かりにいにけり」と本文には書いてあるのです。

奈良の春日の里には、紀有常の女が、姉妹で、決して悪くはないありさまで住んでいました。彼女たちは優しい心の持ち主でした。その娘を見た業平は、姉の方と関係を持ってしまうしました。結ばれたあとも男の心は乱れつづけ、ずっと女を恋しく思っていました。業平は、

春日野の若紫のすりごろもしのぶの乱れ限り知られず

という和歌を贈りました。自分が着ている狩衣の裾を切つて、帯のようにして、それに歌を付けて女のもとに寄越したのです。このふるまいは、昔、鹿島明神が女性と初めて契りを結ばれた時に、帯をお遣わしになられた故事を踏まえています。男が女に帯を贈ると、女の方で「次は何日の日に男と逢いたい」と思ったらその日の数だけ結び目にして男に返すという風習があったのです。この歌そのものの意味は、「若紫のように美しいあなたを見て、わたしの心は惑乱して乱れきっています」ということです。

5・3・2 二首目の作者も業平

業平は、「春日野の」の歌を詠んだ直後に、興のおもむくまま、ひきつづいて二首目の和歌を詠みました。それが、

みちのくのしのぶもぢずり誰ゆゑに乱れそめにし我ならなくに

という歌にヒントを得た歌です。これは、源融が自分の妹に恋して詠んだ歌だと伝えられています。業平は、この源融の歌の意を汲んで歌を作って、女に贈ったのです。

昔の若者は、このように迅速な結婚をしたものなのです。

5・3・3 解説

「姉妹のうちの姉の方を好きになる男」というのは、『源氏物語』宇治十帖でも使われた手法である。この第二変奏曲では、「春日野の」の和歌を「垣間見による心の惑乱」ではなく、関係を持ったあとの「後朝の歌」として解釈しているところが面白い。

また、諸説ある「おひつきて」を「帯を付けて」の意味で解釈してある。最後に、「みちのくの」の和歌は、男の側の和歌の趣旨であると説明されている。現代教育に慣れたわたしたちは、「みちのくの」の歌は「春日野の」の和歌の「本歌」を語り手が種明かししているに決まっているのではないかと、最初から思ってしまうがちである。

「みちのくの」の歌が、第一変奏曲でも第二変奏曲でも、現代的解釈と大きく食い違っているのは、それだけこの章段の「正しい解釈」が読み取りにくく、表現が一義的に定着していないという事実を示しているのではなからうか。

唯一の「正しい」解釈を伝授する教育方法では、試行錯誤の繰り返しとしての「誤読の歴史」が現代人に伝わらない恐れがある。

5・4 第三変奏曲（『伊勢物語闕疑抄』）

5・4・1 男は業平だが、女は名前はわからない

昔と言っても、大昔かもしれないしつい昨日かもしれないのですが、ある男がいました。とは言っても、この男は在原業平のことです。業平は元服して、成人式を済ませました。その後しばらくしてから、奈良の都に出かけたことがありました。彼の祖父に当たる平城天皇も奈良にゆかりのある方ですし、業平本人も幼少時に奈良で過ごしたことがあったのです。ですから、彼の旧宅も所領も奈良にはあったのです。

この春日の里には、大変に美しく幽玄である姉妹が住んでいました。その名前は残念ながらわかっておりません。『古今和歌集』の「読み人知らず」のたぐいであるとお考えください。その姉妹を、業平は偶然にも物越しに、簾の向こう側にちらと見てしまったのです。業平は、決して垣根の隙間からのぞきみるようなぶしつけな人ではなかったのです。この荒れ果てた里に、このような風流な姉妹がいるのは何となく不自然でしたので、不審に思わずにはいられません。

業平は早くも彼女たちに心をかけ、心地が惑ってしまった。『源氏物語』で、光源氏があやしげな陋屋に不似合いな夕顔という女性を見て心が引き付けられてゆく場面とちよつと似ていますね。

業平は旅中のことでしたので、その時は馬上の人だったのです。とりあえず馬上で歌を紙に書き記し、自分の心をはっきり示すために着ていた狩衣の裾を切り取って、手紙に結び付けて姉妹につかわしたのです。その歌は、次のようなものでした。

春日野の若紫のすりごろも忍ぶの乱れ限り知られず

美しい女性を「若紫」に喩えてあります。「美しいあなたを見てしまったために、わたしの心はこんなにも乱れてしまいました」という意味です。とまあ、このように男は女に歌を贈ったのであります。

5・4・2 女も返歌で優雅に切り返した

女の方でも、返事の歌を作りました。業平が鷹狩りをしてあちこち移動しているものから、使者はあちこち彼の居場所を尋ねまわってやつとのことと追いついて、彼に姉妹の歌を手渡すことができたのでした。彼女たちは、自分たちの創作ではなく、源融の歌で当時世間の評判になっていた歌をそのまま借用したのです。その方が折りにふさわしいと判断したのでしょう。ですから、女の返事は、みちのくのしのぶもぢずり誰ゆゑに乱れそめにし我ならなくに

というものでした。もともとの源融の歌の意味は、「あなたゆゑに私の心は乱れてしまうのです」という意味ですが、女たちはここでは意味を組み替えています。「業平様はわたくしたちを見て心が惑ったと言われましたが、醜いわたくしたちがこんなお褒めの言葉をいただくはずはございません。どなたか別のお姫様を御覧になられて、お人違いをされたのではございますまいか」という意味なのです。業平のふるまいも、姉妹の洒落た返事も、どちらも見事なものがありますね。昔の人たちは、このような優雅な恋愛をしたものなのです。

5・4・3 解説

以前、細川幽斎の『伊勢物語閑疑抄』は現代の研究者に示唆するところの大きな注釈書であると称賛したことがある。その名著にして、現代の「通説」と掛け離れた演奏をしているのである。「おひつきて」を、女が男を追いかけて、追いついて歌を贈ったとしているのは、第一変奏曲の男女関係を逆転させたただけであ

る。「ついでおもしろきこと」と思ったのは、女の側であり、源融の歌をそのまま借用する行為が「ついでお面白きこと」なのである。かつ、「いちはやきみやび」を男女双方の掛け合いの妙と取っているのも、第一変奏曲と同様である。

「みちのくの」の和歌は、第一変奏曲と第二変奏曲とは『みちのくの』歌の趣旨を男や女が新しい和歌に詠んで相手に遣わしたと解釈してあったが、第三変奏曲では「古歌をそのまま借用する」という理解が示される。幽斎は、この『伊勢物語』一段と『源氏物語』夕顔巻を重ねるといふ「鑑賞眼」を披瀝しているが、その『源氏物語』では空蟬が他人の和歌をそのまま書き記すことで自分の思いを吐露するという「借用の技法」が使われている。それと同一の手法だと、幽斎は言っているのである。

『源氏物語』や『古今和歌集』に通暁した幅広い視野に立つて、この第三変奏曲は演奏されている。

5・5 第四変奏曲（高等学校古文教育バージョン）

5・5・1 人物名はあえて詮索しない

昔、ある男が元服しまして、奈良の京の春日の里に、所領をもっている関係で鷹狩りに遊びに行きました。その里には、とても優美な姉妹が住んでいたのです。この男は、物の隙間からこっそりと二人のようすをのぞき見てしまいました。この成り行きがまったく意外で心の準備がなく、こんな古めいた都にこれほどの美女がいるという事実が不自然でしたので、男の心は動揺して、恋心に乱れてしまったのでした。男は、自分が着ていた狩衣の裾を切り取って、歌を書き付けて、姉妹に贈りました。その男は、しのぶずりの狩衣を着ていたのです。

春日野の若紫のすりごろも忍ぶの乱れ限り知られず

とまあ、「すぐさま」歌を詠み贈ったのです。「老成して詠み贈った」とする説もあります。このような状況でこのような歌を贈るといふ成り行きが、男には時宜にかなって思われたのでしょうか。

5・5・2 二首目の歌は、一首目の歌の補足説明

ところで、この男の歌は、源融の、

みちのくのしのぶもぢずり誰ゆゑに乱れそめにし我ならなくに

という歌にヒントを得て、男が作ったものなのです。昔の人は、このように情熱

的な風流をしたものなのです。

5・5・3 解説

「唯一の正しい解釈」を標榜しながら、「おひつきて」の解釈が一義的に定まっていな。『伊勢物語』の成立から千年以上が経過した時点での「意義未詳」は、おそらく今後とも「唯一の解釈の発見」が不可能であることを予感させずにはいない。

その一方で、過去において解釈上の最大の難所であった、

春日野の若紫のすりごろも忍ぶの乱れ限り知られず

となむおひつきて、言ひやりける。ついで面白きこともと思ひけむ。

みちのくのしのぶもぢずり誰ゆゑに乱れそめに我ならなくに

といふ歌の心ばへなり。

という箇所の問題点には、一顧もなされていない。「言ひやりけり」と「ついで面白きこともと思ひけむ」という二つの文章の続き具合の解明に腐心した先人たちの苦勞への目配りは、あるいはこの物語の本質解明に多大な寄与をするかもしれないはずなのに。具体的には、語り手が直接表現に介入する「草子地」と呼ばれる部分が、いかに『伊勢物語』的でないか、という事実の直視につながる可能性もある。「ついで面白きこと」以下を「草子地」と把握してしまえば、第四変奏曲のような解釈は自然な結末と思われるが、『源氏物語』に通暁した細川幽斎のような文人までもが「草子地」だと見破れなかったのは、幽斎だけの責任だけではなくて、『伊勢物語』の表現の側の問題なのかもしれないからである。

草子地を前提とする虚構の『源氏物語』と、事実に基づく『伊勢物語』とでは「語り」の方法に根本的な差異があるのかもしれない。そうなれば、「物語」という画一的なジャンル論も考え直さねばならなくなる。

「第四変奏曲を捨てて、第三変奏曲に帰れ」と、わたしは主張しているのではない。「第四変奏曲だけを絶対視する立場から自由になれ」と言っているのだ。

6 おわりに

文章表現の解釈は、一義的ではない。まして、文学作品の主題の解釈は一義的ではなく、多義的である。「多義的」でありながら、文芸的に最も深く鋭い表

現解釈・主題解釈は一つか二つしかないのだろうし、教育上最も「穏当」な解釈も一つか二つであろうし、文学史的なパースペクティブに立った普遍的な解釈も一つか二つなのだろう。しかるに、文芸的解釈・教育的解釈・文学史的解釈のそれぞれの「一つか二つの読み」が微妙に食い違うのが、現実なのである。

表現の何（どこ）を、どのように読むか。この単純な問いかけが、今なお解決されていない。そのために、本稿では平安時代後期から現代までの特徴的な読み方を「変奏曲集」というかたちで提示することに努めた。この作業によって、「研究」ないし「読書」のめざすべきものを再発見しようとしてきた。

豊かな文学性を合わせ持つ注釈書の価値を復権させたくて、その紹介に紙数を費やしたので、一条兼良の『伊勢物語愚見抄』や江戸時代の注釈書群を取り上げる余裕がなかったのが残念である。

それぞれの注釈書は、独自の文学観と『伊勢物語』観とを強固に確立し、その磁場の中で個々の章段の位置付けを説明したり、個別的な表現を解釈したりしている。大きな視点を最初に押さえておかねば、細かな表現の解釈を味読することができない。だから、現代の研究者たちが、過去の膨大な注釈書群を「つまみ食い」することの弊害は大きいと言わねばならない。

中世初期の文学的な（文学的すぎる）注釈書を全否定するのも考え物だが、全肯定するわけにもいかない。といって、今述べたような事情で、美味しいところだけをつまみ食いすることも、「恣意的操作」の謗りを免れまい。

個人的な見通しとしては、『伊勢物語』に関しては細川幽斎の『伊勢物語闕疑抄』あたりにこだわることから、再出発したいと思いついてる。『源氏物語』に関しても、戦国・安土桃山・江戸初期の注釈書群を読み直してみたい。

北村季吟たちの手によって古典学が「静的」かつ「並列的」に集大成される直前の、混沌とした玉石混淆の学説の寄せ集めである注釈書を「動的」に把握することから、季吟以後に徐々に失われていった「研究の可能性」を発掘し、拾い上げたい。この「文学性の喪失」は、既に中世中期の一条兼良の時代から開始していたのではあるが、「清濁併せ呑む」注釈書の中には、まだまだ文学の飲みに満ちたものもあったのだ。

「はじめに」で本稿執筆の目的を高らかに宣言したわりには、竜頭蛇尾の結論で終わってしまった。けれども、過去の研究史のある一点にまで溯って、そこから「進化」をやり直すという試みを開始することが、現在ほど望まれている時代はないということだけは、明らかにになったことと思われる。

欧米の文芸理論を、閉塞した現代の研究に「接ぎ木」するだけでは、遠からず行き詰まることは目に見えている。古典文学を文学史的で内発的な「進化論」の立場から創造し直す営為として、来るべき二十一世紀の「研究」はあるのではないか。

人文社会科学系列 文学研究室
平成9年11月28日 受理

Variations on an *Ise - Monogatari* - Thema

— A Venture for Renewal of *Kokubungaku* —

Keiji SHIMAUCHI

Abstract

This article aims to find an activator of dying Japanese classical literary researches.

The four chapter of *Ise-Monogatari*, 1(Waka-Murasaki), 21(Yo-no-Arisama), 63(Tsukumo-Gami), 69(Kari-no-Tsukai), were variously interpreted. The modern popular opinions are not absolute views.

This paper advocates the making a restart of *Kokubungaku*, appealing to possibility of studies from the late 16th century to the early 17th century, such as *Ise-Monogatari-Ketsugi-Syo* by Hosokawa Yusai.

キーワード：『伊勢物語』，注釈書，細川幽斎，『伊勢物語闕疑抄』